加藤老师来开讲!

点击收听

落语

中国有许多传统曲艺，也就是“说唱艺术”。和中国相同，日本也流传着不少说唱艺术。“落语”正是其中最具代表性的表演艺术之一，有点像中国的单口相声。

中国的相声一般由两名演员合作表演，一唱一和，站在舞台上给大家讲笑话。日本的落语演员称为“落语家”，通常穿着和服在坐垫上正襟跪坐，单人表演。

落语家表演时手里拿一把扇子，连比带划生动形象地讲述各种故事。他自己一个人能不能把故事讲得生动有趣，能不能逗笑观众，靠的全是表演者的功力。

落语起源于江户时代初期，可以追溯到 17 世纪初。早期的落语表演形式比较简单，一般演员就在街头给平头老百姓讲一些有趣的故事，收一些打赏钱，和我们今天看到的落语完全不一样。

到了江户时代中期、也就是 18 世纪下半叶，落语逐渐发展成了现在这种形式。也正是在那一时期，落语家成为了一种职业。落语家分为许多流派，每个流派都需要“拜师”，以师徒相承的方式传授技艺。

落语家通常使用艺名，前面类似姓的部分叫做“亭号”，有：桂、古今亭、三游亭、春风亭、笑福亭、立川、林家、柳家等。这些亭号分别属于不同的流派，从江户时代起代代相传。

落语的内容有八成是诙谐幽默的笑话，剩下的一成是动人的市井故事，一成是可怕的鬼故事。落语在老百姓中广受欢迎，从江户时代中期开始，城市中心的常设剧院每天都会安排落语演出。

这一来，落语家们便遇到了一个难题，笑话讲着讲着就讲完了。

为了救急，日本的落语家开始研究中国的笑话。比如，著名的落语故事《我最怕馒头(まんじゅう怖い)》就是由中国的笑话改编而来的。日语中的“まんじゅう（饅頭）”是“豆沙包”的意思。这个故事是这样的：

很久很久以前，有一群小青年聚在一块儿聊天。一个人问道：“你们最怕什么？”一个人答：“我怕蛇。”另一个人答：“我怕蜘蛛。”还有一个人说：“我怕老婆。”众人一个接一个，说出了自己最害怕的东西。

最后一个男人说：“我怕馒头。”众人奇道：“什么？你怕馒头？就是那种可以吃的馒头？！”男人吓得叫起来：“天哪，快别说了！只要听到‘馒头’两个字，我就浑身发怵。可怕，太可怕了，我先去睡会儿！”男人说着冲进隔壁屋子，一把拉过被褥，从头到脚把自己裹得严严实实。

“那家伙该不会真的怕馒头吧？是真是假，咱试试便知！”于是，众人一起去馒头铺，买了一大堆馒头回来。他们把馒头一个个摆放在躺着的男人周围，然后躲到屋子外头，竖起耳朵听里头的动静。没多久，就听到屋子里传出了一声惨叫：“啊，怎么会这样，好吓人……啊呜啊呜。吓人，太吓人了……啊呜啊呜。”外头的人听了，笑道：“哈哈哈，那家伙真的怕馒头。你们听，他叫得多惨：‘啊，怎么会这样，好吓人……啊呜啊呜。’……嗯？啊呜啊呜是什么？”众人纷纷往屋子里瞧……这一瞧可不得了！只见那男人正拿着馒头啃得津津有味：“啊，吓人，太吓人了……啊呜啊呜。”众人怒道：“你小子，居然耍我们！你到底怕什么？”男人悠悠然地答道：“哎呀，再来一杯苦茶，我就真怕了。”

这个落语改编自中国的一篇题为《吾性畏馒头》的笑话，收录在明末作家冯梦龙编撰的笑话集《笑府》中。

遗憾的是，《笑府》这本书在明末清初的动荡年代不幸散失，在中国没能留存下来。幸好，江户时代的日本人从中国引进了这本书，并在日本出版，因此它得以流传下来。

除了这个《我最怕馒头》的故事以外，日本还有许多落语故事取材于中国古代的笑话。

落语是日本著名的传统表演艺术，和中国的“曲艺”颇为相像。落语也非常重视师徒传承，在娱乐大众以及表演者以“艺”为卖点这两方面，和中国的曲艺异曲同工。

在日本，除了可以在常设的剧院里观看现场的落语表演以外，在电视或网络上也可以观看落语。另外，还有一些动画片和电视剧以落语为题材，讲述落语家的故事。大家如果对落语感兴趣，不妨可以找来看一看。

《加藤老师来开讲！》是 NHK 日本国际传媒中文广播节目《波短情长》中的小栏目，特邀日本明治大学教授加藤彻深入浅出、诙谐幽默地讲解日本文化。您有没有想要了解的日本文化或习俗？欢迎给本节目来信或留言！

加藤先生の開講コーナー!

中国語音声はこちら

落語

中国には多くの伝統的な “曲芸” つまり “说唱艺术” があります。日本にも “说唱艺术” が数多くあります。落語は、日本を代表する “曲芸” の一つで、中国の “单口相声” と似ています。

中国の “相声演员” は２人１組が多く、立ちながら、笑い話を語ります。日本の落語 “演员” 、「落語家」は和服を着て座布団の上に正座して１人で演じます。

落語家は、手に扇子を持ち、身振り手振りと口まねだけで、いろいろな物語を再現します。自分ひとりでどこまで生き生きと喜劇を語れるかが、芸の見せ所です。

落語の歴史は江戸時代の始め、17 世紀初頭までさかのぼります。初期の落語は簡素で、道ばたの露天で大衆を相手に面白い話をしてお金をもらいました。現在の落語とは大違いでした。

落語が現在と同じようになるのは江戸時代中期、18 世紀後半からです。落語家という職業もこの頃に確立しました。落語家は多くの流派に別れ、流派ごとに “拜师” による師弟関係の結びつきを作りました。

落語家の芸名の姓にあたる部分を「亭号」と呼びます。桂、古今亭、三遊亭、春風亭、笑福亭、立川、林家、柳家その他の亭号は、江戸時代から代々、それぞれの流派で受け継がれてきました。

落語の内容は、八割くらいが笑い話です。残りの一割は観客を感動させる人情話、一割は観客を怖がらせる怪談でした。庶民の人気を得た落語は、江戸時代中期から毎日、都市の盛り場にある常設の劇場で上演されるようになりました。

すると、困った問題が生じました。笑い話のネタが尽きてきたのです。

そこで日本の落語家は、中国の笑い話を研究しました。

例えば、落語の有名な演目「まんじゅう怖い」“我最怕馒头” も中国の笑い話が元ネタです。日本語の「まんじゅう」は “豆沙包” を指します。こんな話です。

昔々。若い衆が集まって雑談をしました。「おめえ、何が怖い？」「俺は蛇が怖い」「俺は蜘蛛が怖い」「俺は女房が怖い」。そんなふうに皆が次々と自分が怖い物を挙げました。

最後の男は「俺は饅頭が怖い」と言いました。皆が「え？　饅頭が怖い？　あの、食い物の饅頭が怖い？」「うわぁ、やめてくれ。饅頭って聞いただけで、怖い、怖い。ああ、ダメだ。もう寝るわ」。男は隣の部屋に行き、頭から布団をかぶって寝ました。

「あの野郎、本当に饅頭が怖いのか？　嘘か本当か、試してみようぜ」。皆は饅頭屋へ行き、大量の饅頭を買ってきました。その饅頭を男が寝ている周囲に並べ、部屋の外から聞き耳を立てました。やがて部屋の中から悲鳴がしました。「ひぇぇ、怖い、怖い・・・もぐもぐ。怖い、怖い、もぐもぐ」。「はっはっは。あいつ本当に饅頭が怖いらしい。『ひぇぇ、怖い、怖い・・・もぐもぐ』って・・・ん？　もぐもぐ？」。仲間達が部屋の中をそーっと覗くと・・・・・・なんと、男はムシャムシャと饅頭をうまそうに食っているではありませんか。「あー、怖い怖い・・・もぐもぐ」。「てめえ。欺しやがったな。おめえが本当に怖いのは何だ？」「本当に怖いのは、苦いお茶一杯、かな」。

この落語の原話は、中国の明末の文人・馮夢竜が編纂した笑話集『笑府』という本に載っている “吾性畏馒头” です。

残念ながら、『笑府』は、明末清初の動乱によって中国では一冊残らず消えました。幸い、江戸時代の日本人が中国からこれを輸入し、日本で再発行したおかげで、『笑府』は後世に残りました。

「まんじゅう怖い」以外にも、中国の昔の笑い話をもとにした落語の演目は、いろいろあります。

落語は日本を代表する伝統芸能ですが、中国の “曲艺” とよく似ています。師匠から弟子への「芸」の伝承を大切にする点、民衆の娯楽である点、演者の「芸」が見せ所になっている点は、日本も中国も同じです。

日本では、常設の劇場で落語を見られる他、テレビやインターネットでも落語のビデオを視聴することができます。アニメやテレビドラマでも、落語家が劇中の人物として登場する作品がいろいろあります。ご興味があれば、ぜひ一度、落語をご覧になってみてください。

「加藤先生の開講コーナー！」はNHK 国際放送のラジオ番組『波短情長』のコーナーです。明治大学の加藤徹教授が、日本の文化について楽しく解説します。あなたの知りたい日本の文化や風習は何ですか？メッセージもお待ちしています。